

文脈不要の世界からマクロ文脈的世界へ — 柴さんとともに歩んだ私の言語学の43年 —

アンドレイ・ベケシュ (リュブリャナ大学)
Andrej Bekeš (University of Ljubljana)

はじめに

幅広い好奇心と繊細なユーモアの持ち主でありながら、こつこつと仕事をこなすポジティブなエネルギーを放ち、温かい気配りの持ち主柴宜弘さんが去った後、大きな空白が残っています。私自身の日本語研究、日本語学への携わりも、柴さんとの親交とほぼ重なっています。

簡単に柴さんとの親交、そしてそれと同時に私が地域研究の重要性を認識していく過程について述べたいと思います。

親交の素描

柴さんとの親交は、私が日本語学の道を歩み始めた時期とほぼ重なっています。柴さんが旧ユーゴ時代ベオグラード大学に留学していた頃、私は大阪大学、大阪外大に留学していました。

知り合ったきっかけは1970年代後半、品川の旧ユーゴ大使館での建国記念日パーティでした。柴さんがちょうど留学先から帰ってきて、私は二度目の日本留学で大阪外大の聴講生だったころです。互いの国の留学経験を共有したこともあって、すぐ親しくなりました。

当時二人の共通の話題は、いくらでもありました。1980年代初頭の日本では、自主管理、多民族国家としての旧ユーゴ、あるいは第二次世界大戦のレジスタンスなど、様々な側面が専門家の間だけではなく、坂口尚の漫画『石の花』などのポップカルチャーの分野でも注目されていました。

あいにく、1980年代の半ばからは、その関心のほとんどがユーゴ危機に集中することになりました。1990年代に入ってからさらには旧ユーゴ崩壊・解体およびその後のボスニア内戦、コソヴォ内戦、NATO空爆に発展します。

柴さんとは、度々、そのようなテーマで意見交換、議論する機会がありました。岩波書店などで出された柴さんの著作は、旧ユーゴの状況に対する日本の理解に大きく寄与しています。

2000年代に入ってから、話題はさらにバルカン、日本、地域内での相互理解などに移ります。そしてユーゴ映画も最初から重要な共通の関心の一つでした。

柴さんのスロヴェニア関連の活動

ソ連崩壊およびユーゴ崩壊後、国際情勢が落ち着いた1996年から数年間の間、柴さんは勤め先の東京大学で、スロヴェニア、バルト諸国など、それまで注目されて

いなかった新興国の言語・文化講座の設置に尽力されました。その関係で、スロヴェニア語・スロヴェニア文化関連のシンポジウム等のイベントもオーガナイズして、日本でのスロヴェニアなどの、旧ユーゴからできた国の知名度を上げることに貢献されました。

共にした活動もあります。私から見て非常に重要だったのは、1995年、リュブリャナ大学アジア研究学科ができてから始まった留学生、教員を含む大学間交流です。柴さんのおかげで東京大学とも早い時期に交流協定が締結されました。

1980年代の後半からはスロヴェニアでも、日本でも、家族ぐるみでの楽しい交流もありました。1986年の春、私の両親が来日した際、「アジア太平洋資料センター(PARC)」が運営していた自由学校で開催された両親のレジスタンス体験談では柴さんが司会、解説を務めてくださいました。柴さんが大好きだったスロヴェニアのジュリア・アルプスの懐にあるボヒーニ湖でも一緒に楽しく余暇を過ごしたことがありますし、ゴリシュカブルダのワイナリー巡りもそのような楽しい思い出の一つです。

「文脈不要」の世界から「文脈重要」の世界へ

私は二度日本に留学したことがあります。学部では数学が専攻でしたので、最初の留学は1972～75年、主に大阪大学の修士課程で数学の勉強を続けるためでした。しかし、その間、数学以外、日本語と日本文化に関心が湧いてきたので、1977～1986年の二回目の留学は専攻を理科学から人文学に変えて、大阪外大、そして筑波大学で、日本語学、一般・応用言語学関連の勉強をしました。

言うまでもなく、上記の「文脈不要」は数学をさします。数学というのは、文脈に依存しない普遍的な真理を取り扱う学問だからです。そのような世界から言語学の世界に入ると、色々戸惑うことがありました。学部で数学を学び、言語学のこれといったしっかりしたバックグラウンドなしに日本語学専攻の修士課程に入ることがきたのも、実は当時の言語学がおかれていた特殊な状況と関係しています。

というのは言語学も文脈に強く依存する人文科学の一部であるはずですが、1970年～1980年代は日本でもチョムスキー流の「文脈不要」の、言語の形式的な特徴に注目をしているアプローチがとくに流行っていた時代でした。そこで私の理科系のバックグラウンドがどうも見込まれたらしく、入学できたでしょう。

しかし私の日本語学、言語学への関心は、自分が育てられた多言語環境の影響もあって、「文脈と言語とのつながり」にこそありました。日本語での様々な現象を分析しながら、スラヴ語ではそれはどうなっているのか、そのような問いかけから、より客観的相対的に言語、文化、社会を含む「バルカン」、「東欧」への関心が生まれてきました。これは柴さんとの親交を通じて得られた気づきだと、感謝しています。

それ以前、退屈な話題だと思っていたスロヴェニア人でスラヴ言語学のパイオニアのコピタル (J. Kopitar) やミクロシチ (F. Miklošič) の仕事、バルカン言語の地域研究、そして、さらにプラーグ学派のバルカン言語連合という概念の考案者でもあるトルベツコイ (N. Trubetzkoy) などの研究の面白さを悟ることができました。そのように、「文脈の中の言語」のアプローチが、形式言語学よりもずっと私の言語観に近く、その後の私の言語研究を方向付ける重要な要因になりました。

そのような探求は次第に日本語研究と地域研究の関連性への目覚めにもつながり

ました。現に用いられている語の仕組みを研究すると、歴史的、社会的、地域的条件ぬきにそれが語れないということが次第にわかってきました。

例えば、東アジアでは、誰がいつどのような状況で誰の言語を学んで、それをまたどのように用いたのか、といった例です。言うまでもなく、そのような理解はまた柴さんとの対話で、バルカン、東欧と日本、東アジアの状況を比較しながら深まっていきました。

リュブリャナ大学アジア研究学科発足およびそれ以降：地域研究の重要性を実感

同僚たちとの長年の努力が実った結果、1995年の秋、リュブリャナ大学アジア研究学科が発足しました。スロヴェニアでの体系的な日本研究、中国研究の始まりです。それに伴い、私も当時教えていた筑波大学からスロヴェニアに戻って、日本研究を担当するようになりました。

発足当時のスタッフは中国研究三人、日本研究二人と極めて少人数でした。そのゆえ、可能な限り東アジアという地域的パースペクティブを取り入れて教えていました。語学科目以外、日本～、中国～ではなく、東アジア研究入門、東アジア史入門、東アジア思想史入門などという科目を設けていました。深いことを考えないでそれが当然だと思っていたのです。

一方柴さんも、特に2000年以降の研究活動を見ると、地域共通の歴史および歴史教育の可能性という地域研究的視点がますます強くなっています。

柴さんの研究の重要な一部分だと思いますが、欧州、バルカンの共通歴史教材の試みにとどまらず、東アジアにおいても、その可能性を探る並々ならぬ努力をされました。ご自身の研究の重要な成果はリュブリャナ大学など、旧ユーゴの主な大学とも共有しました。2005年4月1日 CANKARJEV DOM（ツァンカリエヴ・ドム文化会館）で開催のリュブリャナ大学アジア研究学科10周年記念シンポジウムでは、「地域研究の意義——南東欧研究と日本研究——」という題の大変感動的な基調講演を行っていただきました。地域研究の重要性についての貴重な示唆に富む講演でした。



10周年記念シンポジウム：基調講演中



シンポジウム後の楽しい一時：
柴宣弘（基調講演）、高橋武智（客員教授）、稲葉千晴（招待公演JF派遣）、大学院生、筆者

講演で柴さんは主に次のような点について述べました。つまり、南東欧という地

域概念との関連で言えば、私たちにとって重要なのは東アジアという地域概念を共有することである。また、テッサロニキの「南東欧の民主主義と和解のためのセンター」が作り始めているような歴史副教材を、東アジア共通の歴史副教材として作り上げる事こそ最も必要な作業である、と。さらには、南東欧の歴史研究者の経験を東アジアに生かすことの重要性を指摘しました。

最後に、東アジアという地域概念を歴史の授業に用いる必要性を再度強調し、リュブリャナ大学の日本研究プログラムの学生のなかから、歴史教育の問題にも関心をもってくれる人が現れてくれることを期待しているということで締めくくりました。

講演後の懇親会で柴さんは、アジア研究学科の東アジア地域重視を高く評価してくださいました。地域研究重視という方針は、学科の設立以降の状況にも押されながらもかなり直感的に選んだ方針でしたが、それがまた異なった方向から理論的に裏付けられたことで、学科の教員一同はたいへん勇気付けられました。

基調講演のスロヴェニア語訳は学科の紀要である「Azjske in afriške študije (アジア・アフリカ研究)」10-1号、1-5頁に記載されています。



Andrej Bekeš Uvodna beseda	i-iii
1. Uvodno predavanje Nobuhiro Shiba Pomembnost regionalnih študij – JV Evropa in Japonska	
2. Japonska družba – pogledi od zunaj in znotraj Boštjan Bertalančič Japonska in OZN	
Tinka Delakorda Vloga religije v japonski družbi: družina na pragu moderne	
Nataša Visočnik Konstrukti japonske identitete	

その後、柴さんとリュブリャナの近現代史研究所（Institut za novejšo zgodovino - INZ）のペテル・ヴォドピヴェッツさんから、日本とスロヴェニアの歴史教材の比較分析を目的としたプロジェクトに参加しないか、とのお誘いをいただきました。このプロジェクトは柴さんを中心に、2010～13年、そして2015～18年の二度に渡って実施されました。メンバーは日本のいくつかの大学の研究者、スロヴェニアの研究者のほか、後にセルビアからのメンバーも加わりました。このプロジェクトのおかげで、私もスロヴェニアや日本の歴史学者との交流をさらに深めることができました。その成果は下記の二冊のモノグラフとしてまとめられました。

Nobuhiro Shiba, Aleš Gabrič, Kenta Suzuki, Žarko Lazarević (Eds). School history and textbooks : a comparative analysis of history textbooks in Japan and Slovenia. Ljubljana: Inštitut za novejšo zgodovino, 2013. Zbirka Vpogledi, 7.

そして

Žarko Lazarević, Nobuhiro Shiba, Kenta Suzuki (Eds.) The 20th Century Through Historiographies and Textbooks : Chapters From Japan, East Asia, Slovenia And Southeast Europe. Ljubljana: Inštitut za novejšo zgodovino, 2018 Zbirka Vpogledi, 21.



共同プロジェクトの研究者や友人と一緒に：伊勢神宮で

シネマ（ポスト）ユーゴ CINEMA (POST)YUGO

最後に、柴さんと共有していた（ポスト）ユーゴ映画関連の活動に触れたいと思います。柴さんと知り合った旧ユーゴ大使館のパーティには、映画研究者の平野共余子さんもいました。彼女は映画の研究をしていたベオグラード大学の留学から帰ってきたところでした。

2008年でしたか、柴さんと平野さんがそのモーターになって、首都圏のさまざま大学で毎年のだいたい6月に旧ユーゴ映画の傑作を紹介するという企画を始めました。教育・啓蒙活動の側面もありましたが、しかしそこで重要だったのは、なるべく多くの人に鑑賞してもらって、その良さを分かち合うという意図でした。

柴さん、平野さんのほかに、山崎真一さん、セスナ・ビバさん、岡島アルマさん、私なども加わりました。柴さんがいつも手配してくださった東大の駒場キャンパスの洒落た教員のフランス料理店で、毎年何回か次の年の計画を練るために集まるのがいつもとても楽しかったです。当初は「シネマ・ユーゴ CINEMA YUGO」として発足しましたが、旧ユーゴの傑作のネタを尽くしてからは、ユーゴ崩壊後の旧ユーゴ各地域の新しい映画の最先端の流れをフォローするために、企画の名前も「シネマ（ポスト）ユーゴ CINEMA(POST)YUGO」に変えました。回を重ねるうちにさらに映画の好きな仲間が何人か加わりました。東京大学、筑波大学、東洋大学、城西大学など、さまざまな大学が協力して、柴さんのポジティブな精神を受け継いで、これからも続く予定です。詳細は他の同僚に委ねることにします。

終わりに

振り返ってみれば、ビルドゥングスロマンのような話になりましたが、柴さんとの親交が深まるにつれて、私の研究もマクロ文脈依存型の論文が増えていったことはあきらかです。長い親交の中、柴さんのおかげで、三谷先生、ホルヴァット先生

などの先生方、そして山崎信一さんなど、多くのすばらしい教え子たちにも出会うことができました。このような柴さんと別れるのはとても名残惜しいです。

でも、柴さんは成し遂げた仕事の中で、私たちの記憶の中でずっと生き生きとして、そばに居続けてくださるでしょう。

ご冥福を祈ります